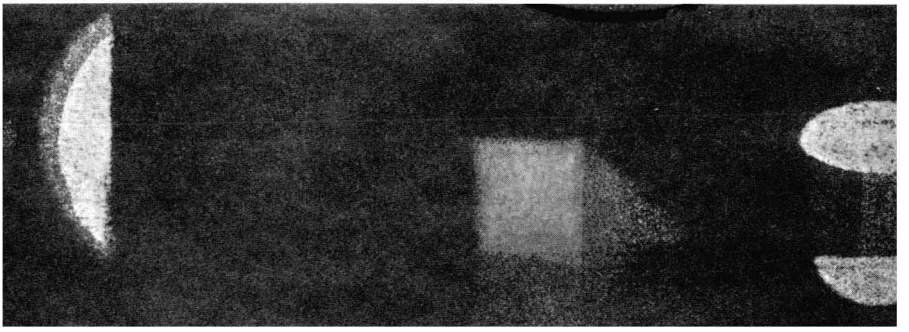
佐多稲子

月の宴



講談社

月の宴
昭和六十年十月二十二日　第一刷発行

著者――佐多稲子
©Ineko Sata 1985, Printed in Japan

発行者――野間惟道
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―二一―二　郵便番号一二二　電話東京〇三―九四五―一二一（大代表）
印刷所――株式会社精興社　製本所――株式会社黒岩大光堂
定価――一六〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-202361-X(0)（文1）

目次

I

雪景色の上の新月　13
月の宴　21
親子の旅　33
遠い日の心象風景　51
こころ　61

II

感動した一言 73
言葉と文字 74
「佇つ」のこと 76
「婦」は古い 78
昔のひびき 80
地声のこと 82
自嘲の文句 84
色のある夢 86
感じ取り方 88
女の主体性 90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

消えた実体　92
友達との電話で　94
いい気なもの　96
売れる筈の一冊　98
「宮地嘉六著作集」のこと　100
「愛しき者へ」に関連した話　102
作家と年金　104
西暦に弱いのは女のせい？　106
梅の挿話　107
町内の鳩　110
水をこぼす楓　113
年賀状と風景　116
魚と肴　119

海の幸　124
切実な自分探し　127
一期一会を掌に　130
頼もしいひとつの例　133
女は、と云う内容　139
文学碑と故郷と　141
土壌　146
「たけくらべ」解釈へのひとつの疑問　150
「たけくらべ」解釈のその後　160
朝日賞授賞式でのあいさつ　166
中野重治　169
　中野重治さんのこと
　中野重治告別式でのあいさつ
「梨の花」その他

国分一太郎　185
国分一太郎さんを偲ぶ
信頼をよせた同志
頼りにした人
野上弥生子　193
中国訪問のときの言葉
野上弥生子さんを憶う
芥川龍之介　203
芥川龍之介の死
「河童の銀屏風」のこと
古いときのこと

装画　駒井哲郎
　　時間の玩具より
装幀　中島かほる

月の宴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

雪景色の上の新月

二月上旬であった。夕方になって窓の雨戸を閉めに二階にあがった。外はまだ明るさを残していたが、連日のきびしい寒さだから早目の戸じまりであった。窓のガラス戸を開けると周りの屋根には積った雪があり、わが家の庭の地面はまだまっ白である。この三、四日は晴れた日がつづいているのに、こんなに雪の残ることは東京では珍しい。この夕方も空はきれいな蒼い色をしていた。向いの屋根の向うには、新宿の高層ビルの頭も二、三見えている。きれいな色に誘われるように見渡して、西の空にかかる新月に出会った。おや、とおもう。屋根に囲まれた街の空で月を見ると、出会うという気がして視線がとまる。五日月ぐらいだろうか。三日月よりは大きい鎌形である。夕明りを受けてほの赤く、しかしきらきらと光っている。ほの赤い色だから冷たい月ではないのだけれど、その光の鮮明さは、周囲を締めつけるきびしい寒気に磨き出されたとでもいうように見える。「冬の月こそ、ものすごし」という歌詞が古い唱歌にあったのをおもい出すが、夕明りの空にかかる新月は、潑剌とした少女のように見えた。雪の残る屋根の向うに、そんな月を見るというのはいつにないこと、私はいっとき、生き生きとし

たその新月に見とれていた。

だが、茶の間の炬燵にもどって、いま見た風景を心の中においたとき、そのひとつひとつがみんな「条件違い」のようにおもえてきた。夕空にかかる新月では冬の月というまとまりにならず、雪の残る屋根の向うにある半月なのに、ほの赤くきらきらと光るのは、やはり如月の感じではなかった。冬の月なら、しんしんと冴え渡る鋭さで迫らねばならない。その月光で下界も凍りつくほどに、黒々と底深く澄んだ上空に孤独に照り輝く月でなければならない。それでこそ冬の月なのであろう。今見た冬空の月は、その条件をみんな欠いていた。その時刻が先ず早かった。上空に冴える月ではなく、陽のあとにつづいてゆく新月であった。が、私の見とれたのはやはり雪景色の上に月を見る珍しさであり、その愛らしい輝きであった。それなら、条件に合わぬなどとおもうのがおかしいのかもしれない。町中暮しの感覚が、風景にまで定型を求めたかと気づくと、そんな自分が貧しくもおもえた。その日の新月が、ほの赤いながら光り鋭く見えたのはやはり冬だからであったろうか。確かなことは知らない。

私などは月の光をただ情緒で受けとめるだけだから、二十数年前の夏、浅間山麓で冴え渡る月を眺めて、そこに人の力で打ち込まれた物質があると考えるのに戸惑ったが、今ではもうそれさえ古い。人が月面を歩いたのを、テレビの画面で見るのもすぐそのあとだった。そして今年は宇宙を人が歩いた。月光に詩情を誘われ、または自分のそのときのおもいにつれて心情をゆすられるということなど、今後はどう変ってゆくのだろう。月に寄せたいにしえの歌が、今

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com